

■しまゆむた

沖永良部島の日本復帰運動

川上 忠志（南日本新聞和泊販売所所長）

奄美諸島が日本に返還されたのが1953年（昭和28年）12月25日、あれから50年、半世紀が過ぎ去った。私も当時小学生、兄や姉につれられて提灯行列や集会に参加し、断食をしたことを今でも鮮明に覚えている。（何の運動か訳もわからずに・・・）

（第二中学校日誌から「十月十日、木曜、晴天、日本復帰祈願のため中食抜きの日」）

奄美の日本復帰運動史の記録は名瀬市中心に書かれたものが多く、周辺離島の記録は少ない。沖永良部、与論の2島分離問題などはどこか片隅に追いやられている。悲しいことです。どこの世界もそうだが、周辺地域は影が薄い。時々私自身も出張で鹿児島市内にいますと、自分の住む島が米粒よりも小さく存在すら忘れてしまうことがある。

私も1993年の復帰40周年頃から復帰運動の写真や資料収集に努め当時の行政関係者や青年団、婦人会、高校生などの証言を求め約10年間走り回った。その膨大な資料や証言は和泊町発行の「復帰運動の記録と体験記」や知名町発行の記念誌、和泊町営有線テレビの「復帰記念特別番組」の放送に生かされた。沖永良部島の復帰運動史は前期と後期に分けられる。前期は昭和27年9月末まで、後期は28年12月末。

- * 昭和20年（1945年）戦争終結、日本敗戦、奄美の日本軍武装解除。
- * 昭和21年、奄美、沖縄など本土から分離米軍支配下に、いわゆる2・2宣言。
- * 昭和21年3月、名瀬市に米国海軍軍政府開庁、南西諸島は米軍政府行政下になる。
- * 昭和21年10月3日、臨時北部南西諸島政

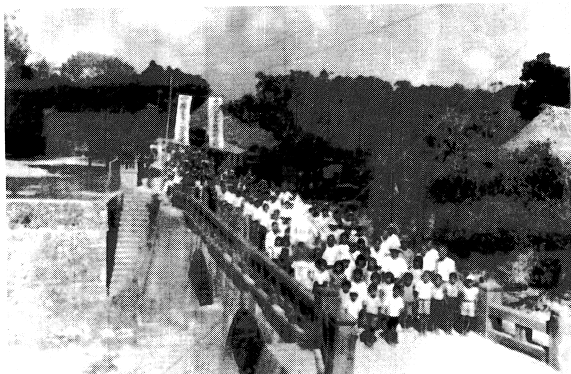
庁誕生、知事豊島至氏。

- * 昭和22年、郡内21市町村長会、各学校長会は日本復帰嘆願を決議する。
- * 昭和24年、本土奄美連合会から復帰署名運動の呼びかけがあった。
- * 昭和25年、宮崎県大島町青年団から復帰運動の呼びかけと署名活動があった。
- * 昭和25年、米軍、沖永良部知名町大山にレーダー基地を設置、米軍兵士駐留する。
- * 昭和26年、奄美大島日本復帰協議会結成。会長に泉芳朗氏選出。
- * 昭和26年、奄美郡民の99.8%（14歳以上）の署名を集め日本へ返せと訴える。
- * 昭和26年、奄美郡内各島で総決起集会開く、集団断食による復帰運動開始。
- * 昭和26年、密航陳情団11人派遣、国会や各国大使館などに陳情訪問。
- * 昭和26年、サンフランシスコ対日講和条約調印。日本は奄美・沖縄をトカゲのシッポのごとく切り離し独立。郡民に虚脱感、運動下火に・・・？
- * 昭和27年、毎日新聞が「沖永良部、与論2島分離返還説」を報道。「北緯27度半以北の奄美諸島返還・・・考慮中」と伝える。

・沖永良部島の復帰運動は1952年（昭和27）9月27日付の毎日新聞報道の前後を境にして大きく分けられる。毎日新聞の記事は現在では誤報と言われている。しかしその2島分離説の果たした役割は大きかった。昭和27年になると復帰運動が中だるみしていた頃、タイミングがよかったと思う。（県立図書館で当時の新聞のマイクロフィルムで調べると、この頃の復帰運動の記事が極端に少なかった

た) この報道によって今まで低調だった奄美全体の復帰運動が再び動き出す。特に南部2島は激烈な運動を展開して返還間近と言われていた奄美の復帰に念を押す形の復帰運動が展開された。

・前期は終戦後の昭和21年3月、米国の軍政府が名瀬市に開設され、貧苦と異民族支配に苦しめられていた郡島民は、やがて復帰運動へと立ち上がる。1951年(昭和26)2月、名瀬市に「奄美大島日本復帰協議会」が結成され全郡島内外に波及していった。しかし沖永良部にも支部が結成され署名活動なども行われているが、盛り上がりにかけていた。青年団代表が密航陳情団に加わり苦難を乗り越えて東京や大阪、神戸に陳情活動に参加しているが、上層部の運動でしかなかった。一般大衆は沖縄に出稼ぎに行ったり、知名町大山の米軍基地の地元雇用や基地経済で賑わい、文化や経済が沖縄に近かったことも影響したのか、そこまでの緊迫感が少なかった。しかし日本に帰れないとなると状況は一変する。



和泊町 南洲神社での祈願祭を終えた町民
(昭和27年10月)

写真提供：知名町 前田写真館

- * 昭和27年9月30日、和泊町で緊急対策会議開催。沖永良部高等学校で生徒大会
- * 10月1日、和泊町民大会開催。4日、知名町民大会開催。
- * 10月6日、知名町全中学校生町内一週デモ行進。和泊町議会2島分離反対議決。

- * 10月8日、知名町世並蔵神社で復帰祈願大会開催。
- * 10月9日、日本本土派遣陳情委員東仲一和泊町長、岡本経良知名町長上京する。与論村長と共に国会や各国大使館、大阪、神戸、鹿児島で陳情活動する。
- * 10月11日、沖永良部学童復帰協議会結成。15日知名町復帰貫徹断食決起大会。
- * 10月16日、和泊町全町小中学校第5回復帰大会開催。作文集を全国に送付。
- * 11月18日、和泊、知名合同町民断食祈願大会開催。
- * 昭和28年1月、知名町婦人会復帰大会開催。両町長陳情活動から帰郷する。
- * 1月31日、大島郡内の高校生が鹿県内の高校生に奄美の実情を訴えるため上鹿。高校生復帰運動派遣団、沖永良部高校代表は生徒会長の大吉敏仁さん。
- * 6月10日、奄美大島連合婦人会長の基八重子さんと副会長の橋口初枝さんが来日中のルーズベルト前大統領夫人に福岡で陳情、東京などで陳情活動する。
- * 8月8日、ダレス声明発表。8月20日和泊町ダレス声明感謝町民大会開催。
- * 12月25日、奄美大島全諸島、日本復帰実現。

昭和27年9月26日、NHKはトップニュースで「奄美諸島の返還は間近」と報じた翌日、毎日新聞は奄美諸島の返還記事をトップニュースとして掲載。岡崎外相とマーフィー米国大使の会談を「北緯27度半以北の奄美諸島の行政権を返還するか考慮中・・・」と報じた。それを見た鹿児島市在住の出身者は、さあ一大変! 「北緯27度半はエラブと徳之島の間、エラブとヨロンは日本に復帰出来ない・・・」と新聞の届かない島に打電した。「南2島は復帰から分離される、ただちに分離反対運動を強化すべき」と・・・。毎日新聞の報道は島の住民や本土にいる出身者に大きな衝撃となった。(半度の差は大きい、27度は

与論と沖縄の間、27度半は徳之島と沖永良部の間)

その報に驚いた島民は行政や各種団体長が参集して緊急対策協議会が開催された。また、すばやく反応したのは高校生であった。彼らには本土進学出来ないと言う危機感があり「この緊急事態に勉強どころではない」と教師ともども「なーんで返さぬエラブとヨロン、同じはらから奄美島、友ようたおう復帰の歌を、我ら血をはくこの思い」と現在のような広報手段が無かった当時、全島に反対運動を広めるべく歌いながら街宣活動を行ったのである。しかしここで面白いことが起こった。民間にはまだトラックが少なかった。レーダー基地の米軍兵士ジョージさんがジープを運転して高校生を乗せ島内を回ったのだ。高校生は米軍から貰ったトランペットを吹きながら・・・。



トラックで島内デモをする高校生
(トランペットなどは米軍払い下げ)

当時、沖高生は野球で米軍と交流があった。沖高に楽器が無いと聞いた米軍は自分たちのを払い下げて与えたと言う。

写真提供：和泊町 宗 昇氏

和泊でも知名でも町民大会が開催され、沖永良部・与論2島分離絶対反対が声高らかに決議された。当時の中学生の証言では「このまま日本に復帰できないとアメリカ人にされる。日本が何かアメリカが何か？分からなかったが子供なりにとにかく怖かった記憶が微かにあった」と言うことをよく聞いた。

昭和27年秋の2島分離情報は沖永良部と与論の一般大衆を含めた島ぐるみの復帰運動に発展、奄美群島の復帰運動を再び燃え上がらせる効果が生まれた。沖永良部では高校生から小中学生、青年団、婦人会までも立ち上がり行政を揺り動かしした。

また「帯の前結びをするな、沖縄に間違われる、頭に物を乗せて運ぶな・・・」和泊の婦人会を中心にして「復帰に差し支える」と帯の後ろ結び(日本結び)の講習会を開いたりして沖縄との絆を断ち切ろうとした。

そのような中でいても立ってもいられない気持ちの島民は和泊、知名、与論の3町村長を陳情に送ろうと言う声が日増しに高まり、10月6日、高千穂神社で壮行祈願祭を行い、町民を前に病を押して上京することになった東仲一和泊町長は「天は私に重大使命を託した、島民の純粹一途な民族的悲願を万難を排して上京し、石にかじりついてでも全奄美諸島復帰を勝ち取って来ます」と絶叫し、和泊港棧橋を埋めんばかりの町民に見送られて、わずか22トンの老朽船新生丸で沖縄に向けて出港した。知名港からは岡本経良知名町長が同行、龍野通雄与論町長と東京で合流、衆参議院や外務省、米国大使館などに陳情活動を行い、神戸や大阪の沖永良部や奄美出身者の総決起大会に参加した。(この時、外務省でのやりとりの中ですでに新聞報道が誤報と分かっていたが・・・)

「お父さん僕を復帰運動で鹿児島にやって下さい」沖永良部高校の生徒会長大吉敏仁は父にお願いした。貧乏のどん底にいる大吉家に鹿児島に行かす金はない。沖永良部島の運動をリードしている大吉は鹿児島の高校生に奄美の実情を訴えたかった。あまりの熱心さに根負けした父は「お前にもたす小遣いは無い。黒砂糖を持って行って鹿児島の親戚に売ってもらって小遣いにしなさい。」

父の軍服を裏返えして着て、串木野市の高校を回った。(その時から文通を始めた彼女

とロマンスが芽生えその後結婚した) 奄美各島の高校生派遣代表は寒い鹿児島県内の各高校を回り奄美の実情を訴えた。

6月になると、奄美大島連合婦人会では来日中のルーズベルト前大統領夫人に、女は女で陳情しようと会長の基八重子さんと副会長で和泊町大城出身の橋口初枝さんを送ることにした。沖永良部の婦人会では橋口さんらの旅費を捻出するために、食料難にもかかわらずソテツの実や芋、塩、米などを供出、お金に換えた。橋口さんらは福岡で会見、陳情すると東京や大阪、神戸に陳情訪問を精力的に行った。橋口は帰島すると留守をあずかる長女に「日本に近く復帰できるわよ」と喜んで語った。それから2ヵ月後の8月8日、ダレス声明が発表される。「これらの諸島に対する日本の権利を復活させる用意がある・・・」続いて15日、外務省は「今度返還される奄美大島は・・・沖永良部島及び与論島を含む旧鹿児島県に属した・・・」と発表。島では嬉しさのあまり「ダレス声明感謝町民大会」が開かれ「復帰万歳」と叫び喜びに沸いた。ついに昭和28年12月25日、クリスマスプレゼントとして日本に復帰した。



復帰実現（昭和28年12月）
ソテツの葉でアーチを作り祝った。

あれから約五十数年、戦争がおわって60年、世界平和を願ったはずが今でもどこかで戦争は続いている。「奄美の復帰は早かった、沖

縄と一緒に良かった」と言う意見もある。奄美のその後の人口減少、沖縄との経済の格差（補助金の格差）等々・・・。しかし当時の先人たちは、戦後の混乱や異民族支配、子孫の教育など戦後復興を考えたらやはり一日たりとも早く母国日本に帰りたいのが人情なのだろう。私たちはそれでいいと思う。先人たちの民族の叫びとして血の一滴も流さずに勝ち得た「日本復帰」の運動を忘れずに、これからの郷土建設に取り組んでほしい。

(2005年2月)

参考文献

和泊町誌、知名町誌、与論町誌
密航陳情報告書（大脇達夫書）
完全日本復帰陳情報告書（和泊・知名・与論町村長）
奄美大島連合婦人会本土訪問報告書
復帰運動の記録と体験記（和泊町発行）
朝日、読売、毎日、南日本、南海日日新聞